

レーザーによる治療が白内障手術のレベルを引き上げる!
リスクの生じる工程をレーザーで行い安全性が向上

白内障、老眼治療

白内障はメスを使用する手術、老眼には眼鏡を使用するのが一般的ですが、レーザーを活用した新しい白内障手術法や老眼治療が注目されています。海外の大学で臨床教授を務め、アメリカ眼科学会などで最新治療について招待講演を行い、国内外で活躍する富田実先生に話を聞きました。

レーザー手術やレンズの進歩で遠近裸眼も可能

白内障の手術は、水晶体を包んでいる薄い膜（水晶体囊（ルビ・のう））を丸く切開して潤った水晶体を取り出し、人工の水晶体（眼内レンズ）に入れ替えるというもので、このと自体は約20年前から変わっていません。つまり、すでに確立された手術法といえますが、切開の方法や、眼内レンズの機能が大きく進歩した結果、視力回復の程度も向上しています。

次に、眼内レンズは単焦点のものから発展し、遠近の2焦点、遠中近の3焦点、さらには遠距離と中距離、中距離と近距離の間にも焦点が合うものが開発され、より自然で質の高い見え方を提供できるようになります。特に難しいのは水晶体囊の切開や水晶体の破碎、乳化吸引ですが、

レーザーで前処置を行うことで、眼内での処置や超音波発射量が格段に減少し、より安全な手術を行うことができるようになりました。従来なら、医師が手作業（フリーハンド）で行う水晶体囊の切開や、眼内で水晶体除去をする工程をコンピュータ制御されたレーザーを用いることにより、正確性と安全性が格段に向上したのです。

視力は近距離で1.0、遠距離で1.5程度まで回復できます。レーザー白内障手術の進歩により、この多焦点眼内レンズの位置設定がより正確に行えるようになり、多焦点眼内レンズの成績をより向上させることができます。

老眼の治療法の進歩も目覚ましく、現在、「角膜インレー」「遠近両用レーシック」「遠近両用フェイキック」



レーシックや老眼治療などに幅広く対応するレーザー治療器。「目にやさしい」のが特徴で、この機種は富田先生が日本で初めて導入した。

これら新しい治療法は、まだ健康保険の適用ではないため、治療には相応の費用がかかるのが実情ですが、見え方の改善によって生活の質は大きく向上するので、検討する価値は十分にあると考えています。

の3つがあります。角膜インレーは、髪の毛より薄いリング状のフィルムを角膜の内層に挿入し、ピンホール効果で近くのものを見るようにする方法。遠近両用レーシックは、近視、遠視、乱視を同時に改善できるレーザー治療。遠近両用フェイキックは眼内コンタクトレンズとも呼ばれ、遠近両用の柔らかいレンズを角膜に挿入。角膜を削らずに治療できることがメリットです。

富田実アイクリニック銀座
院長

とみたみのる
富田 実 先生

医学博士、日本眼科学会認定眼科専門医、元米国ハーバード大学眼科研究員、アメリカ眼科学会役員、国際屈折矯正学会役員理事、温州大学医学部眼科臨床客員教授。

